
INSPIRE

久保 徹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

INSPIRE

【Nコード】

N2820A

【作者名】

久保 徹

【あらすじ】

ユウレイが見える少年永澤一騎と人間世界へやってきた《護霊》の少女の物語

01 朝食の香りに誘われて

彼は朝、目を覚ますと日課である住居の見回りを始める

寢床から軽やかに飛び降り、彼のために設けられた出入口から廊下に出ると朝食のいい香りがしてきた

香りに誘われてリビングの前までやってきた

扉を開けてくれるように一声あげる

「よう、虎太郎。早いな」

扉を開けてくれた同居人の足の間をすりりと抜けて、リビングに入る

「おはよ、虎太郎」

もう一人の同居人だ。朝食の準備をしている

彼なりに挨拶をすると振り返りソファへ向かう

ソファの端は日当たりが良好で、彼の一番お気に入りの場所

そこで丸くなっているうちに暖かい日差しのおかげで、ウトウトと眠気に誘われるまま瞼を閉じた

「また寝たのか、こいつは」

「しょうがないよ、指定席だから。それより一兄、時間大丈夫なの

「？」

「何言つてんだ美紗。まだ5分ある」

「あれ5分遅れてるよ」

「早く言えよ！」

虎太郎はふと目を覚まし大きくあくびをした

今日はどこへ行こうかな……

ソファから降り尻尾をぴんと立て玄関へと歩いていった

彼は長い尻尾と艶やかな毛並みを持つ、黒猫である

「虎太郎、お前も出掛けるのか？いいよなあ猫は気楽だよ」

同居人の声に足を止めいつもより低い位置にある顔を見上げる

バタバタと出ていった同居人を見送ると、反対方向に歩きだした

塀の上にご近所さんを見つけた。飛び上がり一言二言挨拶をかわす

今日は公園に行く予定です——

02 少年の日常

《染桜高等学校・午後12時50分》

午前中の授業を終え、校内は昼休みを過ごす学生の賑やかな声が響いている

その喧騒から逃げるように一人の少年の姿が屋上にあつた

フェンスに寄り掛かって座り、足の前には購買で買ったパンと牛乳が置いてある

だが彼はそれを食べようとはしない

「あのさぁワリイけど、そうゆう話はそっちの連中としてくれないか？」

少年は迷惑そうに言う

「なんだよ！せっかく話せる奴見つけたのに！卑怯者お！裏切り者お！」

「うるせえ！そっちのアイドルの話なんかしろかよ！それよりさっさと逝け！」

少年は虫でも追い払うように手を振り回した

彼の名は永澤一騎。15才の高校1年生だ

その一騎の後を追って二人の少年がやってきた
「かーずつきー！」

一騎が声の方へ目を向けると、凄い勢いで鉄製の扉が開き同じく
ラスの二階堂恭介が飛び出してきた

手には昼食を持っている

「一緒に昼飯食おうぜえー！」

だが次の瞬間、走っていた恭介の足がもつれ

「おぶっ！」

と変な声を出して、コンクリートを顔面から滑った

「顔が！顔があああ！」

「なにしてるの」

恭介の後を付いてきた北川啓吾が、顔を押さえてもがく恭介を冷
やかに見下ろす

啓吾は恭介をスルーして一騎の近くに腰を下ろした

「待つてくださいよ！お二人さん！」

自分を置いて昼食を始めようとする二人に一抹の寂しさを感じた
のか、恭介は起き上がり駆け寄ってきた

「そついえば永澤君、さっき誰かと話してなかった？」

パックのジュースにストローを差しながら啓吾が言った

「え？あ、いや。一人だったけど」

「じゃあ気のせいかな」

啓吾は首をかしげる

一騎には人知れぬ悩みがあった

それはユウレイが見えてしまうこと

見えるだけではない。《見える》《話せる》《触れる》の3重苦なのだ

「おい恭介。なんかおもしろい話ないのか？」

（き、急に無茶をおっしゃるー！）

心の叫びがそのまま表情に出てしまう

「そ、そういえばこの前コンビニに行ったとき、店員の女が森三中の大島にそっくりで……」

それでもなんとか話そうとする恭介の横で、一騎は話題が変わったことにホッとしていた

放課後、帰り支度をする一騎に恭介が

「帰りゲーセン寄ろうぜ！」

と一騎の肩に手を置きながら言った

「わりい、おれパス」

「えあ！？じゃあ啓吾は！？」

ものすごい剣幕で啓吾に詰め寄る

「僕もちよつと今日は……」

「……そうかい、そうかい！お前らそろつておれを独り者にしよう
つてコンタンだな！」

恭介は2本の指で一騎達を指差した

「お前らなんか二度と誘つてやるもんかああ！」

あらぬことを叫びながら走り去った恭介を二人は無言で見送った

啓吾と校門前で別れ、一騎は帰路についた

その途中、公園のそばの道を歩いていると電柱のそばに、倒れて
割れた空瓶と花束があった

一騎はその花束を手を取った

「あの……お兄ちゃん？」

声の方へ振り向くと、そこには小学生くらいの少女がいた

「私のこと分かるの？」

「ああ」

少女は笑顔になる

「そうか。この前ここであつた事故で……」

「お花、みんなが持ってきてくれたんだけど、自転車の人がぶつかって倒れちゃったの」

少女の悲しそうな顔を見た一騎は、空瓶を立て置き、その横に花束を置いた

「よし、じゃあ新しいの持ってきてやるよ」

「本当に!？」

少女の顔に笑顔が戻った

花を持ってくる約束を交わし、一騎は帰宅した

翌日、午前2時03分

少女はしゃがみ込んで瓶に入った花束を嬉しそうに眺めている

その視界の中に誰かの足だけが入った。鼻緒が見えた

「誰？」

少女が顔を上げるとそこには、黒い装束に白い長衣を羽織った若い少女が立っていた

「おぬしが一騎の言っていた子供か」

「……お姉ちゃん、もしかして……」

少女は彼女の穏やかな目を見ると、何かを理解したようだった

当然、理解できたのは少女が霊だからだ

「もう未練はないか？」

「……うん」

少女も穏やかな笑顔で答える

それを聞いた長衣の少女は腰の刀に手を掛け、一息に鞘から抜いた

「大丈夫、苦痛は欠片もない」

少女は目を閉じる。刀が少女を貫いた

「安心して暮らすがい」

少女の体が光に包まれ空へと昇っていく

それ以来一騎は少女の霊を見ることはなかった

03 それは唐突に

西の空に太陽が沈みきろうとしている頃、染桜町の上空を一羽の鳥が飛んでいる

何かを探すようにシタを見下ろしながら飛んでいると、反転急降下
長い尾をなびかせて人々が行き交う街中へ降りていく

人々の間を擦り抜けるように飛ぶその鳥を、人々は気にするそぶ
りを見せない

まるでその鳥が見えていないかのように

そのままビルとビルの間路地に着地した

その路地の奥から姿を見せたのは、一匹の黒猫
彼らは向かい合い何か言葉を交わしているようにも見えた

「グッモーニン！」

その声で目を覚ました一騎が、最初に目にしたのは目前に迫っ
た足の裏だった

「ギヤアアア！」

「この野郎……息子の寝首をかこうとはいい度胸だなあ……！」

一騎はひらりとかわし、逆に相手を押さえ付けた

一騎の父親、慎は顔を床に押しつけられもがいている

「や、なるな一騎……もう教えることはなにも……」

慎は開業医の町医者。母親のいないこの家で男手一つで一騎と美紗を育ててきた

朝のこんなやりとりも日常茶飯事のことだ

「一兄い！父さーん！朝ご飯できたよー！」

一階から二人を呼ぶ美紗の声が聞こえてきた

ようやく慎の顔から手を放し、階段を降りていく

（そついや最近虎太郎どこ行ったんだ？）

「一騎！今日こそはゲーセンに行くぞ！お前を倒すために編み出した必殺コンボを……」

「パス」

一騎は自信満々で宣言する恭介を、あっさりとふった

「北川さん……最近永澤さんが付き合い悪いと思いませんか？」

「よしよし、今日は僕が付き合ってあげるから」

泣き付く恭介を啓吾は肩を叩いて慰める

「お前なんかウンコ踏んで“あの人臭くない？”とか言われちまえ
！」

振り返って涙ながらに叫ぶ恭介に

「アホか」

と言い放ち学校を後にした

「ただいまあ」

「遅ーい！」

玄関を開けた途端、慎の蹴りが一騎を襲った

「今何時だと思ってんだ！我が家の夕食は毎晩7時と決まっとろー
が！」

倒れた一騎の横で慎は腰に手を当て仁王立ちで言った

一騎はゆつくりと立ち上がる

「いってえなあ！何しやがんだ！」

「うるさい！家族の団欒を乱すものには血の制裁を下すのみ！」

「今時健全な高校生を毎晩7時に帰宅させる家がどこにあんだよ！」

廊下から聞こえてくる騒音を気にもかけることなく、美紗は黙々と食事を続けていた

「はあー……」

ようやく静かな自室に入った一騎はカバンを置くとベッドに仰向けに倒れこんだ

「つたく、あの親父はどーしていつも……」

その時部屋のドアが静かに開いて虎太郎が入ってきた

「虎太郎、最近お前どこ行ってたんだ？」

一騎は虎太郎に話し掛ける

「なに、少しばかり野暮用でな」

「へえー、野暮用ね……うん！？」

ベッドから飛び跳ねるように起き上がり、床にちょこんと座る虎太郎を見た

「お前……今……しゃべっ……た？」

だが虎太郎は答えることなく座っている

「だよなあ。猫がしゃべるわけが……」

一騎は虎太郎の首根っこをつかまえてヒョイと持ち上げた

「離さんか。たわけ」

ガリガリと嫌な音を立て一騎の顔を引つ掻いた

「ギヤアアア！ やっぱしゃべっ……ギヤアアア！」

「これしきで狼狽えるな小僧」

そう言っただけで虎太郎は倒れこんでいる一騎の腹に乗った

「猫がしゃべることが“これしき”かあ！ つか乗るんじゃないよ
！」

「ようやく落ち着いたか」

「はあ、はあ、おれは夢でも見てんのか？」

「証明するか？」

虎太郎は鋭く尖った爪をちらつかせる

「いえ、結構です」

呼吸を整えて虎太郎に目をやる。どこからどう見てもただの猫だだが確実に人間の言葉を話した。顔の傷の痛みも現実のものだ

「信じられぬ、といった顔だな」

「当たり前だ。しゃべる猫なんか初めてだ。虎太郎、お前何者だ？」

「この猫は正真正銘ただの猫だ」

「この猫……？」

「……付いてくるがよい」

虎太郎はドアノブに飛び付き開けると、部屋を出ていった

一騎も今の出来事にかなりの違和感を感じながらも、虎太郎の後を付いていった

一騎の運命の夜が始まった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2820a/>

INSPIRE

2010年10月22日00時16分発行